

## 元代江南社会研究の現状と展望：知識人の問題を中心に

于，磊  
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/27499>

---

出版情報：九州大学東洋史論集. 40, pp.1-22, 2012-03-31. 九州大学文学部東洋史研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 元代江南社会研究の現状と展望 ——知識人の問題を中心に——

于 磊

## はじめに

1206年にチンギス・カン（太祖）が建てたモンゴル帝国は、急速な拡大を遂げてユーラシアの大半を覆う大帝国となった。そして、第五代クビライ（世祖）の至元十三年（1276）に至ると、南宋を滅ぼして、江南を支配下に置いた。同時に、クビライは高麗王室を帰服させ、さらに海を越えて日本や東南アジアに対しても遠征を行った。モンゴル帝国は、まさに陸と海を制圧する世界帝国になったといえる（杉山1992、pp. 245-256）。

江南という地域は、南北朝時代以来、中国本土の歴代王朝において、経済・文化の面で重要な役割を果たしていた。モンゴル帝国に先行する隋・唐・宋は、江南を版図に収めることにより、王朝の性質の変容を余儀なくされた。このことは、大運河の開通とそれに伴う経済・物流システムの発展や科挙の実施による大量の知識人の出現にも端的に現れている。こうしたモンゴル帝国以前の状況を踏まえれば、江南に対する政策は、元朝にとってもその王朝のあり方を規定する重要な一要素であったと言える。

1980年以来、日本におけるモンゴル帝国史・元代史研究は、新しい視角の導入と史料の活用により、大きく展開してきた。この新しい潮流は、杉山（1991・1996・1997）によって概観され、展望が示されている。そして、杉山は、北宋—金—元という北流と北宋—南宋—元という南流から当該期の中国史をとらえる竺沙（1977）の見解を紹介した上で、華北研究の空白とともに、南宋から元にかけての江南研究が極めて手薄であることを指摘している（杉山1996、pp. 505-506、杉山1997、pp. 333、341-342）

そのうち、華北については、石刻史料の活用などにより、新しい視座と研究対象が模索されつつあり、その研究は着実に進展している。例えば、飯山（2001）は金元代華北社会に関する研究史をまとめた上で、展望を提示し、その課題を追究した成果は飯山（2011）として結実した。

他方、江南については、長い間にわたって、南宋「遺民」研究と、先述した「征服王朝」の枠組みに基づいた研究<sup>1)</sup>に偏っていた。前者は、南宋「遺民」の旧王朝に対する忠誠と「異民族王朝」に対する反感を描出するに止まる傾向にある。後者は、「征服王朝」による江南統治の特質を解

明しているが、杉山(1996、pp. 508-509)が述べるように、「北からの発想による独特の「半蒙半漢」研究」が主流であり、中国史の立場から元代中国にアプローチする研究は決して多くなかった。

後述するように、近年では江南研究においても新しい展開がみられる<sup>(2)</sup>ようになってきているが、研究の偏りと手薄さという状況は大きく変わっていない。こうした中、「明代中国との見通しをえるためにも、南宋・元代を通じた江南研究が、活発に行われる必要がある」とする杉山(1996、p. 507)の提言は、今なお有効である。このことは、欧米でも、「宋元明移行期」<sup>(3)</sup>(Song-Yuan-Ming transition)という視座から、宋・元・明の連続性に注目し、宋や明と比較して元代がどう位置づけられるかを追究する潮流が生まれている(Smith and von Glahn 2003、中島2005a)ことから明らかである。

筆者は、知識人の動向が、宋から元、そして明へと移行する時代における江南社会を考える上で鍵となると考えている。そして、元朝の対江南政策を検討する上でも、対知識人政策は重要な位置を占めていた。元代の知識人について、森田(1990)は、儒戸・科挙など知識人政策や地域社会における知識人の地位などの論点を通じて、知識人研究の課題を整理している。本論でも紹介するように、その後、新たな科挙関係史料を用いた科挙研究<sup>(4)</sup>が展開している。

科挙と知識人社会に関連して、近藤(2007b、pp. 3-5)は、科挙が膨大な落第者を抱え込みつつも、伝統社会体制を再生産する機能を果たしていた状況を、「科挙社会」と定義づけた<sup>(5)</sup>。こうした社会が宋代に形成されていたという前提に立つと、長く科挙を実施しなかった元朝の対江南政策は、その社会に大きな変容をもたらしたことが予想される。宋代を通じて優遇されていた知識人が、元代においてどのような立場にあったかについては、冷遇されていたとする見方が従来は支配的であったが、近年ではこうした見解は否定されつつある(蕭啓慶1979、森田1999など)。しかしながら、江南治下の知識人の具体像が十分解明されているとは言い難い。そこで、本稿では、その具体像に迫る研究のための基礎作業として、江南知識人の問題を中心に元代江南社会研究の現状をまとめた上で、森田(1990)・櫻井(2002)・渡辺(2006)が提示した課題を踏まえながら、筆者の問題関心に基づいてその展望を論述する。

## 1. 宋元交替期の知識人

元代江南社会研究において、宋元交替期の知識人の問題は、早くから多くの研究者が注目した課題である(周祖謨1946、孫克寬1964、姚從吾1970、勞延煊1979)。ただし、20世紀前半の中国における研究者は、意識的・無

意識的を問わず、宋末元初を彼らが置かれていた時代状況に重ね合わせていた。そのため、彼らの研究は往々にして、20世紀前半の中国の時代状況に規定される面が多々見られた。これらの研究に対して、20世紀後半の研究者は、こうした主観的な要素を排除し、客観的なデータに基づいて、宋元交替期の知識人の動向を把握しようとした。そして、広範な史料から宋末元初期の進士出身者を抽出し、彼らが宋末元初にとった選択を「出仕」「隱居」「殉国」の三類に分けて詳細な分析を行った(植松1989、蕭啓慶1996、陳得芝1997)。これらの研究成果によれば、「隱居」を選択した進士出身者が大きな比率を占めているという結論が得られている。そして、彼らの多くは、クビライ時代を経て、書院の「山長」や地方官学の「教授」「教諭」を担当するようになったことも指摘されている。こうした役職につくことを、元朝に仕えるとみなすことについては、さらに検討する余地もあろう。しかし、数十年を経てこれら知識人の元朝に対する態度に大きな変化が生じたことは確かである。

そのような知識人の態度の変化の要因としては、元朝に対する反感が薄らいできたことが指摘されている。しかし、それだけではなく、彼らの「經世濟民」の理想の影響を考慮に入れなければならないだろう。当時の知識人の文集には、しばしばこうした理想が言及されているからである。

森田(1999)は、元朝に仕えなかった「遺民」として名高い王応麟がしばしば地域の公的建造物の碑記を撰述していた事実に着目し、王応麟と地方官府との関係を詳細に考察した。また、近藤(2008)と錢茂偉(2009)は王応麟の子孫が元朝の科挙を受験したことや地方官に依頼して王応麟の著作『玉海』を出版したことを論述する。これらは、宋元交代期の知識人を総体として概略的に考察する従来の分析とは異なり、各地域社会を基礎とした知識人社会の実態を個別具体的に明らかにした重要な成果である。近藤(2007a・2008)は、慶元路(現在の浙江省寧波市)の王応麟と黄震の関係、湖州路(現在の浙江省湖州市)の趙孟頫と周密の関係についても分析を行っている。

一方、元朝に仕えた知識人の代表として、しばしば取り上げられてきたのが趙孟頫である。櫻井(1998)は、彼の活動の時期を四つに分けて、それぞれの時期に趙孟頫と交際していた知識人について詳細に分析した。主として美術史・文学史の文脈から研究されてきた趙孟頫の活動を、政治史・地域社会史に位置づけ直した成果である<sup>(6)</sup>。

また、方回も多くの研究者が注目した人物である。孫克寬(1958)・潘泊澄(1978)の研究では、方回の南宋に対する忠誠の側面ばかりが強調される傾向にあった。しかし、筆者が論じたように、方回が元朝に仕えながらも南宋の「遺民」と良好な関係を築き、複雑な立場にあったことは、宋

元交替期の知識人の一側面として重要である(于磊2008)。

このことに関して、村上(1993)は、宋元交替期の知識人と後世の評価を検討し、元に仕官した人物に対する同時代の知識人の一般的な認識は、決して偏狭なものではなかったと指摘した。そして、『四庫提要』は、元朝新政権に仕えた知識人を「武臣」と見なしているが、その背景には清朝の知識人が「武臣の思想」を強調した乾隆帝の政治的意図を汲み取らざるをえなかった状況があったと述べている。

## 2. 元代中期の知識人

元代中期に活躍した知識人<sup>(7)</sup>は元朝統治下で育ち、その意味で、完全な元代人であった。この点では、南宋治下に生まれ、中国の伝統的な文化の中で過ごした青年期に外民族の侵攻を受け、亡国の悲哀を目あたりにした元初期の知識人と比べ、王朝交替がもたらした影響は薄らいでいたと考えられる。

この時期において、まず注目すべき知識人は虞集である。虞集は詩や散文など文学の大家として、「一代文宗」と呼ばれた。そのため、早くから中国文学の研究者に注目されてきた(姫沈育2004・2008)。歴史研究においては、江南出身の知識人として、虞集と元代中後期の政治史、特にトク・テムル(文宗)及びトゴン・テムル(恵宗)時期の政治との密接な関係について、考察が加えられている(Langlois 1978、鄭忠1994)。金文京(2003・2007)は、高麗国王の側近であった李齊賢との関係を考察し、その成都における山川祭祀への使節行を検討している。

虞集は、後世『宋元学案』草廬学案で重要な理学家に位置づけられ、江南道教との関係も密接であり、理学思想や道教の視座からの研究は不可欠である。しかしながら、従来は、虞集が呉澄の学術を継承・発展させたと論じることとどまっている(孫克寛1976、査洪徳1999、姫沈育2007)。また、彼の出身地である四川の蜀学もその思想に大きな影響を及ぼしているが、虞集を蜀学の系譜にどのように位置づけるのかについては、未だ十分には検討されていない<sup>(8)</sup>。

その他の元代中期の知識人としては、袁桷・倪瓚・歐陽玄・宋本・陳基などに関する研究がある(福本1982・1984・1985、稲葉2002、許守泯2006、楊育鏐2009)。虞集をはじめとして、彼らは中国の伝統的な知識人として積極的に元朝の政治に参画し、政書や史書の編纂にも従事していた。

特定の地域における知識人集団に関する研究も少なくない。とくに、婺州(現在の浙江省金華市)を拠点とした柳貫や黄潛などを中心とする金華学派の研究がある(孫克寛1975、歐陽光2001a・2001b、徐永明2005)。ここでは、その学派の形成・学術的特徴・その影響及び学派内部の知識人の

関係などについては、ほぼ解明されている。一方で、地域的な影響力・文化的特色を有し、史料的状态もよい徽州（現在の安徽省黄山市）などの地域についての研究は、なお不十分な状況にある。こうした中、徽州の知識人をとりあげた宮（2001）は画期的な成果である。宮は、徽州の知識人の一人、程復心を取り上げ、その著作『四書章句』の出版や、在野の知識人が推薦を得て任官する過程を分析し、その過程において知識人や官僚が果たした役割を描出した。この研究によって、江南地域社会における知識人同士の関係や地方政府との関係は、具体的かつ多面的に理解できるようになった。また、趙華富（1999a）は徽州の胡一桂・陳樸・汪克寛など知識人の「経学」著作を分析し、そこには「経世致用」の面が見られることを強調した。

最後に、元代中期の知識人と書塾・書院・官学との関係について触れておく。江南知識人、とくに江南在地知識人のほとんどが書塾・書院・官学における教育に携わっていた。そこは彼らにとって単に教育に従事する場としてだけでなく、知識人のネットワークを形成する場としても、重要な意味をもっていたのである。片山（2001a・2001b）は、呉澄・虞集などが、著名な知識人が開いた館塾の教師という立場で、元朝の有力者と交際する機会をもち、その推薦で中央政府に官職を得ていたことを明らかにした。また、多くの北方の知識人は江南の書院の山長や県学の教諭となっており、これによって、南北にわたる知識人のネットワークも形成されていた（徐梓 2000・申万里2007）。

### 3. 元明交替期の知識人

元明交替期の知識人<sup>9)</sup>について、趙翼は『廿二史札記』卷三十「元末殉難者多進士」と卷三十二「明初文人多不仕」の条で、元王朝への忠節と明王朝への不信という傾向を指摘している。趙翼のこうした見解は比較的広く知られているが、銭穆（1964・1994a）は、宋濂・高啓など元明交替期の知識人の文集を分析して、元明交替期の知識人の元朝へのアイデンティティや「遺民」意識は強くなかったと反論している。宋濂・楊維禎など元明交替期の代表的な知識人をとりあげた研究に、要木（1992a・1992b）、三浦（1998・2003）がある。

近年、展龍（2008）は、元代末期における江南知識人の元朝への帰属意識の形成、また非漢民族知識人とのネットワークの形成などを論じた。展龍（2010a）では、元明交替期の知識人が元末の動乱に直面した際、徽州・江西など地域で「義兵」・「郷兵」を組織し、元朝と協力して地域社会を保全したことを指摘している。

こうした時代状況を取り上げた研究として注目されるのが劉祥光（1997）

である。劉祥光は、徽州地域を代表する知識人であった鄭玉が、元朝・明朝の仕官を拒否し、拘禁された末に自殺するのに至った時代背景に迫ろうとする論文である。そこでは、宋代から元代の中期に至り、「道統」の概念が「隱居」の理念に結びつき、新たな隱居観が生じたことが明らかにされている。すなわち、当時の知識人は、政治と距離を保ちながら、「道統」の継承を優先課題としていたと主張している。

1990年代以降におけるモンゴル帝国史研究・元代史研究の進展によって、この時代が暗黒の時代であったとするイメージは払拭されつつある。近年では、むしろ民族・文化など多方面で中国史全体に大きな役割を果たしたという逆の評価によって、この時代を理解し直す動きが多く見られるようになった。こうした元に対する評価の変化を受けて、明朝に仕えなかった知識人に対する再検討が進められた。しかしながら、これら元明交替期の知識人の総体的な動向は必ずしも明らかになっておらず、基礎的な作業と実証が求められる課題である。

また、国家－社会関係との関連性から元明交替期の知識人を考察する必要もある。伊藤(1997)は、元末慶元路における陸学の大家として有名な趙偁が慈溪県尹に提出した地方政治改革案を分析し、明初期に朱元璋の行った地方政治改革案との関連性を論じた。そして、朱元璋が趙偁の門人に信頼を寄せていたことに注目し、元末の地方政治改革案が朱元璋に影響を与えたことを明らかにした。

#### 4. 元代知識人と科挙

前節までにおいて、元代の前期・中期・後期という時間軸に分けて、江南知識人に関する研究を整理した。本節及び次節では、科挙と宗族にそれぞれ焦点を当てて、江南知識人と地域社会との関係についての研究状況と課題を論述する。

科挙に関する先行研究については、すでに森田(1990・2001b)、陳高華(2001a)、櫻井(2002・2004b)、渡辺(2006)がそれぞれの問題関心にそって詳細に紹介している。以下においては、科挙に関する研究を、制度研究、社会との関連を論じた研究の二つに分けて論述する。

周知のように、元代においては、長期間にわたって科挙が行われていなかった。この点について、早くから多くの研究者はその原因を解明しようと試みると同時に、オゴデイ時代に実施された戊戌(1237)の選試に注目してきた(有高1932、安部1959、宮崎1965、姚大力1982、植松1989、劉元珠1993)。

皇慶二年(1313)に科挙の開始が決定され、延祐二年(1315)から実施

されるようになった。元代科挙の郷試・会試・殿試をめぐる研究としては楊樹藩（1968）、丁崑健（1986）、李治安（1999）、陳高華（2004）、吳志堅（2010）が挙げられる。近年では、『宋元科挙題名録』・『元統元年進士題名録』・『新刊類編歷舉三場文選』・『礼部韻略』などの科挙史料や「進士題名碑」などの石刻史料に基づき、進士及第者を考証し、それに基づいて分析が加えられている（蕭啓慶1983b・1987・2000a・2000b・2000c・2001a・2006・2009、森田1993・2001a・2001b、楊訥1994、桂栖鵬1994・1997、黄仁生1995・2003、陳高華2001b・沈仁国2002・2003・2008、櫻井2004a・2004b）。これらの研究によって、元代に十六回行われた科挙の及第者1135名（研究者によっては1139名とする）が明らかとなっており、蕭啓慶（2010）は、科挙及第者を集成・考証した『元代進士輯考』の出版を予告している。

制度研究の深化に伴い、社会との関連を考察する研究が現れるようになった。まず、挙げなければならないのは蕭啓慶の一連の研究である。蕭は、宋元明にわたって、江南進士の地域的分布や、その一族の継続性などを分析した（蕭啓慶1997・1999a・2001b・2008）。また、元代に特有の蒙古・色目進士について、その家系や婚姻関係についても詳細に論述している（蕭啓慶2000d・2003a・2003b）。櫻井（2009）は、こうした家系から、慶元路のカルルク人を取りあげ、その仕官と科挙をめぐる、最初河南から慶元路に移住した過程とその背景を解明した。

また、科挙が実施されるようになると、科挙に関する書籍の出版も盛んになった。鈴木（2000）は、『程氏家塾読書分年日程』を著した程端礼の目的が、「経世済民」の志厚い士を育成するカリキュラムを作り出すことにあったと論じた。また、それが朝廷の手によって各地に頒行されたことを明らかにし、その背景として、程端礼と江南知識人のネットワークの關係に言及している。宮（2003）も、江南の知識人が科挙開始に応じるために読んでいた書籍群を考察し、その背景に元朝が主導した出版事業があったことを解明している。

一方、梁庚堯（2002）は、宋元時代以来しだいに官学化された書院と科挙との關係について、以下のような見解を提出している。宋代から民間の書院でも科挙に関わる科目を教授しており、それ故、書院は科挙と密接な關係があった。そして、元代では、三十年以上の長い間科挙が実施されなかったが、江南における書院の科挙化の傾向は継続しており、元代でも科挙に関連する内容を教授していた。こうした状況を根拠として、江南知識人が科挙の開始を望んでいたと述べている。

また、科挙開始以前、科挙不実施が知識人社会にどのような影響を与えたのか考察することも、元代江南知識人の動向を考察する上で重要である。近年、奥野（2010）は、金・南宋以来の知識人の挙子業と詩との關係に対

する議論を考察することにより、元代前半における「科挙停止」が作詩熱の勃興を促したことを論じた興味深い成果である。今後、科挙不実施に対する知識人とその社会の反応を様々な局面から検討する必要があるだろう。

筆者は、今後の科挙研究においては、近年になってようやく利用されるようになった科挙史料・石刻史料を積極的に活用し、科挙受験層の家系に対する個別研究を行い、それに基づいて、科挙を通じた一族の地位上昇の状況、科挙と地域社会との関係に注目すべきであると考えている。このような個別研究に際しては、カルルク人を取り上げた櫻井（2009）や徽州休寧の程氏を取り上げた朱開宇（2004）の手法が有効である。

## 5. 元代知識人と宗族

地域社会及び知識人の研究において、宗族は最も重要な問題とされてきた（井上1998、小林2002、馮爾康2009、錢杭2009）。井上（1998、pp. 71-82、p. 85）は、日本における中国宗族史に関する研究動向を三期に分けて紹介し、森（1980・1983）による知識人研究が宗族研究に大きな影響を与えたと位置づけた上で、知識人が宗族の形成・発展に果たした役割を注目すべきであると指摘した。

周知のように、江南では、典型的な宗族が広く見られる。江南は、南宋や初期の明政権の基盤となった地域であり、そのため、江南の宗族研究は、宋あるいは明との関連を追究するという立場から行われてきた（井上・遠藤2005）。宋と元のつながりについては、遠藤（2005・2007）が、先行研究に基づいて、宋元宗族の歴史的特質及び知識人と地域社会との関係をまとめている。（遠藤2005、pp. 7-8）は、宋元宗族の歴史的な特徴を以下の五点に総括できるとした。第一に、宋元の宗族は規模が比較的小さく、祖先祭祀の範囲も限られていた。第二に、宋元宗族の祭祀や儀礼を大きく規定したのは朱熹『家礼』であるが、必ずしも一つの規範に統一されていたわけではない。第三に、宗族再編の中心的な役割を果たしたのは「士大夫」と呼ばれる階層の人々であり、宗族形成の動きが民衆にまで深く浸透することは少なかった。第四に、宗族の分布は長江流域及びそれ以南に偏っており、南方中国においても宗族が発達した地域や階層は限られていた。第五に、宋元各王朝は宗族や族産を社会の普遍的な存在として扱うのではなく、家族や家産の延長すなわち「家」や「戸」の範疇でこれに対応した。

近年の研究においては、宗族の主体としての知識人が、宗譜の編纂・祠堂の設立・族産の経営などを行っていたこと、及び宋元交替の際の宗族の対応が注目されている（森田1978、遠藤1990、劉曉2001、青木2005、万安玲2008）。

次に、元と明とのつながりについては、元明交替期の劇的な変革が宗族

の形成と展開に大きく影響したことが指摘されている（Dardess 1974、漆俠1989、井上1992・1993、湯開建2001、章毅2007）。一方で、檀上（1982a・1982b）は、元明交替期における婺州浦江の「義門鄭氏」をとりあげ、鄭氏一族の知識人が元朝と深い関係を築き、朝廷から「義門」と顕彰されていたが、元明交替期の政局に直面し、朱元璋政権と協力したことを明らかにした。こうした状況から、檀上は、元明交替の連続性、元代江南地主を立脚基盤とした明政権の性格を指摘している。

理学と宗族との関係、族譜の編纂と宗族観念の形成などをめぐって、江南の宗族を考察する研究も行われている（許守泯2001、申万里2006a、章毅2008）。特にポイントとなるのが徽州である。中島（1995）は、宋元時代の徽州において、在地有力者・名望家が紛争処理などを通じて郷村秩序を維持し、それが明初の老人制成立の基盤となったことを論証した。また、中島（2004・2005b）は、皇慶二年（1313）の墓地売却禁令に注目し、徽州の宗族が、外地移住によって世代を経るごとに分散しがちな同族を再統合していたことを論じた。また、趙華富（1999b・2004）は、徽州の族譜が、明清時代と異なり、「祠堂」・「祠産」を記していないことを指摘し、「世系」・「支派」のみを記録していた背景として、徽州宗族が「譜の収族機能」を重視していたためであると結論づけた。

また、江南にモンゴル人や色目人などの外来集団が雑居する状況があったことも、元代の特質として注目されている。張沛之（2009、pp141-193）は、江南の平定以来、将領として江西に寓居するようになったタングート李氏一族の政治的・軍事的経歴・社会的ネットワーク・婚姻関係などを詳細に論述している。このように江南においてモンゴル・色目人が雑居している状況に関しては、潘清（2006）など多くの研究が行われている。近年では、陳得芝（2010）が、江南の民族融合と中華文明の多様性との関係を強調している。

## 6. 今後の展望—むすびにかえて

以上、筆者の問題関心にに基づき、知識人の問題を中心として江南社会研究を整理してきた<sup>(10)</sup>。以上の整理を通じて浮上してきた研究の課題を踏まえ、江南知識人に関連する社会史研究の展望を示したい。

第一に、華北社会との関係である。とくに、江南の知識人と華北社会との交流に留意しなければならない。北宋の知識人の多くが行動した地域は中原に偏っていた。そして、南宋以降は、江南の人々のほとんどが、淮河より北へ赴く機会をもたなかった。しかしながら、元代になると、多くの江南の知識人が大都に赴き、さらに、皇帝に随行して上都に赴くこともあった<sup>(11)</sup>。このような経験は、江南出身の知識人の見聞を広めることにな

り、彼らの世界観にも大きな影響を与えたはずである。例えば、勞延煊(1979)によれば、江西で生活していた呉澄は、多くの北方からの知識人と交流した結果、クビライ政権に対する態度を改めるようになっていく。このような視点から、建康(現在の江蘇省南京市)・大都(現在の北京市)など「通都大邑」に赴き官職を求め、あるいは勉学に励んでいた江南知識人「遊士」の活動に注目した研究が現れており(申万里2006b・2008、丁崑健2001)、そこでは、「遊士」の華北における獵官活動や華北の知識人との交流が論じられている。しかしながら、このような活動が彼らの王朝に対する認識や世界観にどのような影響を与えたかという問題は、ほとんど検討されていない。

第二に、多数の中下層知識人の動向に目を配る必要がある。本論で言及したように、多くの研究者が著名な江南の知識人をとりあげている。しかしながら、多数を占めた中下層の知識人が元朝に対して、どのように対応したのかという問題は、十分に議論されていない。彼らの動向を考察することこそが、江南知識人の具体像を解明することにつながるのである。そして、彼らの動向を宋元明のスパンの中に位置づけることにより、宋元社会の連続性と変容が十分に把握できると確信する<sup>(12)</sup>。

第三は、「はじめに」でも述べたように、伝統社会体制を再生産する「科挙社会」は元代になると、どのように変容していくのかという問題である。元代では、科挙が実施されるようになって、官僚総数における科挙及第者の占める割合という意味で、科挙そのものが果たした役割は大きくなった。こうした状況において、南宋における知識人の地域化を促した、科挙に基づく一族や知識人社会の結合と維持<sup>(13)</sup>は十分に機能しなくなったのである。こうした歴史状況において、元代の知識人は、科挙社会とは異なる地域社会秩序を必要としていたはずである<sup>(14)</sup>。

最後に史料状況について述べておきたい。1980年以降、金元時代の華北社会研究において、石刻史料が果たした役割は大きい<sup>(15)</sup>。華北の石刻史料については、整理・公刊が進んでいるが、江南については、そもそもどの程度存在しているのかすらわかっていない。江南の石刻史料状況を調査し、把握していくことは一つの課題となろう。他方、研究蓄積が薄いこともあって、基本史料である元人文集の徹底的な利用という面でも大きな余地を残している。さらに明代の編纂史料にも多くの元代史料が埋もれており、積極的な活用が求められている<sup>(16)</sup>。

## 註

- (1) 愛宕松男が指摘したように、華北地域と異なり、江南地域の人々にとって、モンゴルの統治は、初めて経験する異民族による統治であった。愛宕は、こ

の状況について、「江南の人士・民衆が抱いた違和感は、金朝の遺民である漢人も想像できないほどのものだったにちがいない」（愛宕・寺田1998、pp. 141-142）と形容している。こうしたイメージは、従来の「征服王朝」という視角と共振して増幅したといつてよい。従来の元代江南に関する研究のほとんどは「征服王朝」の枠組の中で行われた（藤枝1948、田村1964・1971・1985、大島1992など）。なお、杉山（1997、p. 332）は、「征服王朝」という枠組みが「中華主義」の性格を色濃く帯びたものであると指摘している。そして、近年では、征服－被征服の二項対立の枠組みを超え、在地の官民から元代江南社会の状況を明らかにした植松正の注目すべき成果も現れてきている（植松1986・1997・1999・2001・2004）。

- (2) とくに宮（2006）をはじめとして、文化政策に関する研究から新しい展開が生まれている。こうした研究状況については櫻井（2002）の紹介がある。
- (3) 「宋元明移行期」という論点は、近藤（2009、p. 9）が指摘するように、「現在のところまだ問題提起の段階であるが、元朝を歴史上どのように位置づけるか、議論の枠組みは東アジア、ユーラシア大陸東半にまで広げられる必要がある。」これに関して、李治安（2011）は、「宋元明移行期」という用語を批判しつつ、元代から明前期を、北方と南方の要素が衝突・融合しながら整合していく時代と位置づけるべきであると提唱した。
- (4) 近年の元代科挙研究については、渡辺（2006）による整理がある。
- (5) ほかに近藤（1999、2009、pp. 3-4）も参照。
- (6) その後刊行された趙孟頫研究として、鄧淑蘭（2007）・王韶華（2008）がある。
- (7) 本稿における元代中期の知識人は、テムル（成宗）からイリンジバル（寧宗）にかけての37年間（1294-1333）に活動していた知識人を指す。
- (8) 胡昭曦（2000）は虞集を宋代「蜀学」の衰退期の代表者と位置づけているが、その思想の内容については具体的に触れていない。
- (9) 元明交替期の知識人に関する研究を体系的に整理したものとして、展龍（2010b）がある。
- (10) 本稿では詳述しなかったが、文学作品を用いた知識人研究は、大きな可能性を秘めている。例えば、金文京（2008）は、『三国志平話』の記述を分析することにより、元代江南知識人の「華夷観」や「正統観」を考察した注目すべき成果である。
- (11) 例えば、江西出身の周伯琦は、至正十二年（1352）にトゴン・テムルに随行して上都に赴き、詩歌一卷を残した。周伯琦『扈從詩』（一卷、文淵閣四庫全書本）を参照。
- (12) この点について、つとに中島（2005a、p. 482）が「元代史には地域社会論の影響はほとんど及ばず、宋代史・明清史との対話も乏しかった」と指摘している。また、宋代・明清代史の研究者は、宋元交替や元明交替に対して「地域社会論」という視点から元代江南にアプローチする傾向にあった。宋代・明清代における地域社会研究については、岸本（2000）、伊藤（1998）、岡（2010）を参照。
- (13) 例えば、Hymes（1986）は、南宋の知識人が婚姻を通じて「科挙家族」を維持し、地域の防衛や社会の福祉など地域における活動を主体的に行い、地域

社会秩序を構築するローカル・エリートであったことを指摘している。また、黄寬重(2008, pp. 220-223)は、貧困層に属した知識人の科挙受験扶助を目的として、福建の「万桂社」などの互助団体や蘇州の「吳学義廩」などの「郷曲義荘」が設置され、これが知識人の地域への帰属意識を促したことを考察している。なお、知識人の活動の地域化については、岡(2003)を参照。

- (14) この問題については、于磊「江南知識人にとっての宋元交替——徽州における地域の保全と社会秩序の構築——」(近刊)において詳しく議論している。
- (15) 石刻史料については、杉山(1996・1997)、森田(2004, pp. 53-58, 2006)、飯山(2001)、船田(2007・2011)などを参照。
- (16) 明代の編纂史料に収められる元代史料を「発見」して活用した成果として、宮(2005a・2005b)がある。筆者も注(14)所掲論文で、明代編纂の『済美録』を活用した。

## 参考文献

### 【和文】

- 青木 敦 2005 「宋元代江西撫州におけるある一族の生存戦略」井上・遠藤2005
- 有高 巖 1932 「元代科挙考」『史潮』2-2
- 安部健夫 1959 「元代知識人と科挙」『史林』42-6(安部1972に再録)
- 1972 『元代史の研究』東京：創文社
- 伊藤正彦 1997 「元末一地方政治改革案——明初地方政治改革の先駆——」『東洋史研究』56-1(伊藤2010に再録)
- 1998 「中国史研究の『地域社会論』——方法的特質と意義——」『歴史評論』582(伊藤2010に再録)
- 2010 『宋元郷村社会史論』東京：汲古書院
- 稲葉一郎 2002 「袁桷と『延祐四明志』」『人文論究』52-2
- 井上 徹 1992 「元末明初における宗族形成の風潮」『文経論叢』27-3(井上2000に再録)
- 1993 「宗族形成の動因について——元末明初の浙東・浙西を対照として——」『明清時代の法と社会』編集委員会(編)『明清時代の法と社会：和田博徳教授古稀記念』東京：汲古書院(井上2000に再録)
- 1998 「伝統中国の宗族に関する若干の研究の紹介」『文経論叢』33-3(井上2000に再録)
- 2000 『中国の宗族と国家の礼制：宗法主義の視点からの分析』東京：研文出版
- 井上徹・遠藤隆俊 2005 『宋一明宗族の研究』東京：汲古書院
- 飯山知保 2001 「金元代華北社会研究の現状と展望」『史滴』23

- 2011 『金元時代の華北社会と科举制度——もう一つの「士人層」——』東京：早稲田大学出版部
- 植松 正 1986 「元代江南の一高官の犯罪」『香川大学一般教育研究』30（植松1997に再録）
- 1989 「元代江南の地方官任用について」『法制史研究』38（植松1997に再録）
- 1997 『元代江南政治社会史研究』東京：汲古書院
- 1999 「元末浙西の地方民と富民——江浙行省検校官王良の議案をめぐる——」『史窓』56
- 2001 「元代浙西地方の税糧管轄と海運との関係について」『史窓』58
- 2004 「元代の海運万戸府と海運世家」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』3
- 遠藤隆俊 1990 「宋末元初の范氏について——江南士人層の一類型——」『歴史』74
- 2005 「宋—明宗族の研究：総論——宋元の部——」井上・遠藤2005
- 2007 「墳寺から祠堂へ——宋元士大夫の墳墓と祖先祭祀——」『東北大学東洋史論集』11
- 岡 元司 2003 「宋代の地域社会と知——学際的視点からみた課題——」伊原弘・小島毅（編）『知識人の諸相——中国宋代を基点として』東京：勉誠出版
- 2010 「地域社会史研究」遠藤隆俊・平田茂樹・浅見洋二（編）『日本宋史研究の現状と課題——1980年代以降を中心に——』東京：汲古書院
- 大島立子 1992 『モンゴルの征服王朝』東京：大東出版社
- 奥野新太郎 2010 「挙子業における詩——元初の科举停止と江南における作詩熱の勃興——」『中国文学論集』39
- 愛宕松男・寺田隆信 1998 『モンゴルと大明帝国』東京：講談社
- 片山共夫 2001a 「元代の家塾について」『九州大学東洋史論集』29
- 2001b 「元代の家塾について（続）」『九州大学東洋史論集』30
- 岸本美緒 2000 「二一世紀へ向けての東方学の展望 宋代から清代中期を中心に」『東方学』100
- 金 文京 2003 「李齊賢在元事跡考（其の一）・第一次入元から峨眉山奉使行まで」吉田宏志（編）『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』平成11年度～14年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究

- 成果報告書(課題番号11309011)
- 2007 「高麗の文人官僚・李齊賢の元朝における活動——その峨眉山行を中心に——」夫馬進(編)『中国東アジア外交交流の研究』京都:京都大学学術出版会
- 2008 「『三国志平話』の結末についての試論」三国志学会(編)『狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集』東京:汲古書院
- 黄 寛重 2009 (見城光威訳)「両宋時代の政策と土風の変化」『中国——社会と文化』24
- 小林義廣 2002 「日本における中国の家族・宗族研究の現状と課題」『東海大学紀要』文学部78
- 近藤一成 1999 「宋代士大夫政治の特色」『岩波講座世界歴史九 中華の分裂と再生』岩波書店(近藤2009に再録)
- 2007a 「宋末元初湖州呉会の士人社会」記念論集刊行会(編)『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』東京:汲古書院(近藤2009に再録)
- 2007b 「シンポジウム「科挙からみた東アジア——科挙社会と科挙文化——」企画趣旨」『中国——社会と文化』22(近藤2009に再録)
- 2008 「黄震墓誌と王応麟墓道の語ること——宋元交替期の慶元士人社会——」『史滴』30
- 2009 『宋代中国科挙社会の研究』東京:汲古書院
- 櫻井智美 1998 「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』56-4
- 2002 「日本における最近の元代史研究——文化政策をめぐる研究を中心に——」『中国史学』12(中国語訳:櫻井2004c)
- 2004a 「元代科挙受験持込許可書をめぐって——『工場備用排字礼部韻註』を中心に——」岩井茂樹(編)『中国近世社会の秩序形成』京都:京都大学人文科学研究所
- 2009 「元代カルルクの仕官と科挙——慶元路を中心に——」『明大アジア史論集』13
- 笠沙雅章 1977 『征服王朝の時代』東京:講談社
- 杉山正明 1991 「日本におけるモンゴル(Mongol)時代史研究」『中国史学』1
- 1992 『大モンゴルの世界 陸と海の巨大帝国』東京:角川書店
- 1996 「モンゴル時代史研究の現状と課題」宋元時代史の基本問題編集委員会(編)『宋元時代史の基本問題』東京:汲古書院
- 1997 「日本における遼金元時代史研究」『中国——社会と文

- 化』12
- 鈴木弘一郎 2000 『『程氏家塾読書分年日程』をめぐって』『中国哲学研究』15
- 田村実造 1964 『中国征服王朝の研究 上』京都：東洋史研究会
- 1971 『中国征服王朝の研究 中』京都：東洋史研究会
- 1985 『中国征服王朝の研究 下』京都：同朋舎
- 檀上 寛 1982a 「義門鄭氏と元末の社会」『東洋学報』63-3・4(檀上1995に再録)
- 1982b 「元・明交替の理念と現実——義門鄭氏を手掛かりとして——」『史林』65-2(檀上1995に再録)
- 1995 『明朝専制支配の史的構造』東京：汲古書院
- 中島楽章 1995 「徽州の地域名望家と明代の老人制」『東方学』90(中島2002に再録)
- 2002 『明代郷村の紛争と秩序——徽州文書を史料として——』東京：汲古書院
- 2004 「墓地を売ってはいけないか?——唐—清代における墓地売却禁令——」『九州大学東洋史論集』32
- 2005a 「宋元明移行期論をめぐって」『中国——社会と文化』20
- 2005b 「元朝統治と宗族形成——東南山間部の墳墓問題をめぐって——」井上・遠藤2005
- 藤枝 晃 1948 『征服王朝』大阪：秋田屋
- 福本雅一 1982 「元朝文人伝(5)耶律楚材・袁桷」『帝塚山学院短期大学研究年報』30
- 1984 「元朝文人伝(7)倪瓚」『帝塚山学院短期大学研究年報』32
- 1985 「元朝文人伝(8)欧陽玄」『帝塚山学院短期大学研究年報』33
- 船田善之 2007 「元代漢語公文書(原文書)の現状と研究文献」森田憲司(編)『13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究 元朝史科学の構築のために』日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書(課題番号16320099)(中国語訳：船田2009)
- 2011 「石刻史料が拓くモンゴル帝国史研究——華北地域を中心として——」吉田順一(監修)、早稲田大学モンゴル研究所(編)『モンゴル史研究——現状と展望——』東京：明石書店
- 三浦秀一 1998 「元末の宋濂と儒道仏三教思想」『東洋古典学研究』6
- 2003 『中国心学の稜線——元朝の知識人と儒道三教』東京：

## 研文出版

- 宮崎市定 1965 「元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢関係——科举復興の意義の再検討——」『東洋史研究』23-4 (宮崎1992に再録)
- 1992 『宮崎市定全集 11 宋元』東京：岩波書店
- 宮 紀子 2001 「程復心『四書章句』出版始末攷——大元ウルス治下における江南文人の保举——」『内陸アジア言語の研究』16 (宮2006に再録)
- 2003 「「対策」の対策——大元ウルス治下における科举と出版——」木田章義(編)『古典学の現在Ⅴ』文部科学省科学研究費特定領域研究「古典学の再構築」総括班(宮2006に再録)
- 2006 『モンゴル時代の出版文化』名古屋：名古屋大学出版会
- 2005a 「徽州文書新探 ——『新安忠烈廟神紀実』より——」『東方学報』京都77
- 2005b 「徽州文書にのこる衍聖公の命令書」『史林』88-6
- 村上哲見 1993 「武臣と遺民——宋末元初江南文人の亡国体験——」『東北大学文学部研究年報』43 (村上1994に再録)
- 1994 『中国文人論』東京：汲古書院
- 森 正夫 1980 「明代の郷紳——士大夫と地域社会との関連についての覚書——」『名古屋大学文学部研究論集』77 (森2006に再録)
- 1983 「宋代以後の士大夫と地域社会——問題点の模索——」谷川道雄(編)『中国士大夫階級と地域社会との関係についての総合的研究』1982年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(森2006に再録)
- 2006 『森正夫明清史論集 第三巻〈地域社会・研究方法〉』東京：汲古書院
- 森田憲司 1978 「宋元時代における修譜」『東洋史研究』37-4
- 1990 「元代漢人知識人研究の課題二、三」『中国——社会と文化』5 (森田2004に再録)
- 1993 「至元三十一年崇奉儒学聖旨碑——石刻・『廟学典礼』・『元典章』」梅原郁(編)『中国近世の法制と社会』京都：京都大学人文科学研究所(森田2004に再録)
- 1999 「碑記の撰述から見た宋元交替期の慶元における士大夫」『奈良史学』17 (森田2004に再録)
- 2001a 「進士題名碑 歴代の進士合格者たちの記録」『しにか』2001-3
- 2001b 「元朝の科举資料について——銭大昕の編著を中心に——」『東方学報』京都73 (森田2004に再録)

- 2004 『元代知識人と地域社会』東京：汲古書院
- 2006 「「石刻熱」から二〇年」『アジア遊学』91
- 要木純一 1992a 「元末文人に関する一試論」『島根大学法文学部紀要文  
学科編』18
- 1992b 「楊維禎論」『島根大学法文学部紀要文科学編』17
- 渡辺健哉 2006 「近年の元代科挙研究について」『集刊東洋学』95
- 【中文】
- 陳 得芝 1997 「論宋元之際江南士人的思想和政治動向」『南京大學學  
報』1997-2 (陳得芝2005に再録)
- 2005 『蒙元史研究叢稿』北京：人民出版社
- 2010 「從元代江南文化看民族融合与中華民族的多樣性」『江  
蘇文史研究』2010-1
- 陳 高華 1996 「元泰定甲子科進士考」南京大学元史研究室(編)『內  
陸亞洲歷史文化研究』南京：南京大学出版社
- 2001a 「『二十世紀的中国科挙制度史研究』の一点補充」『歷  
史研究』2001-3
- 2001b 「兩種『三場文選』中所見元代科挙人物名録——兼說  
錢大昕『元進士考』——」『中国社会科学院歷史研究所學刊』1 (陳高  
華2005に再録)
- 2004 『中国考試通史 第二卷 宋・遼・金・元』北京：首都  
師範大學出版社
- 2005 『陳高華文集』上海：上海辭書出版社
- 2010 『元朝史事新証』蘭州：蘭州大學出版社
- 船田善之 2009 (彭向前訳)「元代漢文公文書(文書原件)の現状及其  
研究文献」『西夏学』4
- 鄧 淑蘭 2007 「關於趙孟頫生平幾個問題的考論」『船山學刊』2007-3
- 丁 崑健 1986 「元代科挙制度」『国立政治大學學報』17
- 2001 「從仕宦途徑看元代的遊士之風」蕭啓慶(編)『蒙元的  
歷史与文化：蒙元史學術研討會論文集』台北：學生書局
- 馮 爾康 2009 『中国宗族史』上海：上海人民出版社
- 桂 栖鵬 1994 「元代色目人進士考」『新疆大學學報(哲学社会科学版)』  
1994-4 (桂栖鵬2001に再録)
- 1997 「元代進士仕宦研究」『元史論叢』6 (桂栖鵬2001に再録)
- 2001 『元代進士研究』蘭州：蘭州大學出版社
- 胡 昭曦 2000 「宋代蜀学的轉移与衰落」張其凡・陸勇強(編)『宋代  
歷史文化研究』北京：人民出版社(胡昭曦2004に再録)
- 2004 『宋代蜀学論集』成都：四川人民出版社

- 黄 寬重 2008 「南宋政策与士風的变化」『基調与変奏：七至二十世紀的中国』台北：国立台湾政治大学歴史学系・中央研究院歴史語言研究所・《新史学》雜誌社（日本語訳：黄寬重2009）
- 黄 仁生 1995 「論元代科举与辞賦」『文学評論』1995-3  
 ———— 2003 「元代科举文献三種發覆」『文献』2003-1
- 姬 沈育 2004 「20世紀以来虞集研究総述」『鄭州大学学报（哲学社会版）』37-2  
 ———— 2007 「虞集与南方道教的密切關係及其原因」『鄭州大学学报（哲学社会版）』2007-6（姬沈育2008に再録）  
 ———— 2008 『一代文宗虞集』北京：中国社会科学出版社
- 劳 延焯 1979 「元初南方知識分子」『中国文化研究所学报』10
- 李 治安 1999 「元代鄉試初探」『南開学报（哲学社会科学版）』1999-6（李治安2003に再録）  
 ———— 2003 『元代政治制度研究』北京：人民出版社  
 ———— 2011 「元和明前期南北差異的博弈与整合發展」『歴史研究』2011-5
- 梁 庚堯 2002 「宋元書院与科举」中国史学会（編）『第一回中国史学国際会議研究報告集：中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展』東京：東京都立大学出版会
- 劉 祥光 1997 「從徽州文人的隱与仕看元末明初的忠節与隱逸」『大陸雜誌』94-1
- 劉 元珠 1993 「蒙元儒吏關係：延祐之開科与抑吏」『慶祝王鍾翰先生八十寿辰學術論文集』瀋陽：遼寧大学出版社
- 劉 曉 2001 「宋元金溪吳氏研究」『中国社会科学院歴史研究所学刊』1
- 欧陽 光 2001a 「論元代婺州文学集团的伝承現象」北京師範大学古籍所（編）『元代文化研究 第1輯 国際元代文化學術研討会專輯』北京：北京師範大学出版社  
 ———— 2001b 「從文人群落到文人集团——元代婺州文人集团再研究——」『文史』2001-1
- 潘 泊澄 1978 『方虛谷研究』台北：新文豐出版公司
- 潘 清 2006 『元代江南民族重組与文化交融』南京：鳳凰出版社
- 漆 俠 1989 「宋元時期浦陽鄭氏家族之研究」『劉子健博士頌寿紀念宋史研究論集』京都：同朋舎
- 錢 杭 2009 『中国宗族史研究入門』上海：復旦大学出版社
- 錢 茂偉 2009 「由隱居而出仕：王忞麟及其後裔在元代的人生軌跡」『寧波大学学报（人文科学版）』2009-2

- 錢 穆 1964 「読明初開国諸臣詩文集」『新亞學報』6-2（錢穆1994bに再録）
- 1994a 「読明初開国諸臣詩文集続篇」（錢穆1994bに再録）
- 1994b 『錢賓四先生全集 20 中国學術思想史論叢（三）』台北：聯經出版公司
- 沈 仁国 2002 「元泰定丁卯科進士考」『元史及民族史研究集刊』15
- 2003 「錢大昕『元進士考』中至正末四科進士統考」『元史及民族史研究集刊』16
- 2008 「『嘉定錢大昕全集・元進士考』点校補正」『元史及民族与边疆研究』20
- 申 万里 2006a 「元代的浦江鄭氏——中国古代同居共財家族的一個個案考察——」馮天瑜（編）『人文論叢 2005年卷』武漢：武漢大学出版社
- 2006b 「元代遊学初探」『中国史研究』2006-2
- 2007 『元代教育研究』武漢：武漢大学出版社
- 2008 「元代江南儒士遊京師考述」『史學月刊』2008-10
- 孫 克寬 1958 「癸辛雜識記方回事疎証」『蒙古漢軍及漢文化研究』台北：文星書店
- 1964 「元初南宋遺民初述——不和蒙古人合作的南方儒士——」『東海學報』15
- 1975 『元代金華學述』台中：私立東海大学出版社
- 1976 「元虞集与南方道教」『大陸雜誌』53-6
- 湯 開建 2001 「元明之際廣東政局演變与東莞何氏家族」『中国史研究』2001-1
- 万 安玲 2008 「宋元轉變的漢人精英家族：儒戶身份・家學傳統与書院」常建華（編）『中国社会歷史評論 第9卷』天津：天津古籍出版社
- 王 韶華 2008 「元初書家題画詩論——以趙孟頫・鄧文原・鮮于樞為例——」『中国文化研究』2008-1
- 吳 志堅 2010 「元代的鄉試——以有司為中心——」『元史及民族与边疆研究』22
- 蕭 啓慶 1979 「元代的儒戶：儒士地位演進史上的一章」『東方文化』16-1・2（蕭啓慶1983aに再録）
- 1983a 『元代史新探』台北：新文豐出版公司
- 1983b 「元統元年進士錄校注」『食貸月刊』13-1・2・3・4
- 1987 「元至正十一年進士題名記校補」『食貸月刊』16-7・8
- 1996 「宋元之際的遺民与武臣」『歷史月刊』99（蕭啓慶1999bに再録）

- 1997 「元代科举与菁英流動」『漢学研究』5-1 (蕭啓慶1999bに再録)
- 1999a 「元代科举与江南士大夫之延續」『元史論叢』7 (蕭啓慶2008に再録)
- 1999b 『元朝史新論』台北：允晨文化實業股份有限公司
- 2000a 「元至順元年進士輯録」『国立台湾大学文史哲學報』52
- 2000b 「元至治元年進士輯録」『宋旭軒教授八十榮壽論文集』台北：宋旭軒論文集編委会
- 2000c 「元延祐二年与五年進士輯録」『台大歷史學報』24
- 2000d 「元代蒙古色目進士背景的分析」『漢学研究』18-1 (蕭啓慶2008に再録)
- 2001a 「元至正前期進士輯録」『燕京學報』新10
- 2001b 「元朝南人進士分布与近世区域人才昇沈」蕭啓慶(編)『蒙元的歷史与文化：蒙元史學術研討會論文集』台北：學生書局 (蕭啓慶2008に再録)
- 2003a 「元明之際士人的多元政治選取：以各族進士為中心」『台湾大學歷史學報』32 (蕭啓慶2008に再録)
- 2003b 「元季色目士人的社会網絡」『中央研究院歷史語言研究所集刊』74-1 (蕭啓慶2008に再録)
- 2006 「元朝科次不詳進士輯録」『簡牘學報』19
- 2008 『元代的族群文化与科举』台北：聯經出版事業公司
- 2009 「賡統錢大昕的未竟之業：談元代進士錄的重構」『科學學論叢』2009-1
- 2010 「元代科举特色新論」『中央研究院歷史語言研究所集刊』81-1
- 許 守泯 2001 「元代金華士人的宗族觀——從修譜談起——」北京師範大學古籍所(編)『元代文化研究 第1輯 國際元代文化學術研討會專輯』北京：北京師範大學出版社
- 2006 「吳下衣冠盡楚材——元代蘇州寓居士人陳基——」『成大歷史學報』30
- 徐 永明 2005 『元代至明初婺州作家群研究』北京：中國社會科學出版社
- 徐 梓 2000 『元代書院研究』北京：社會科學文獻出版社
- 楊 育鎡 2009 「元儒宋本生平考述」『淡江史學』21
- 楊 訥 1994 「關於『元統元年進士錄』的版本与校勘」南開大學歷史系(編)『祝賀楊志玖教授八十壽辰中國史論集』天津：天津古籍出版社

- 楊 樹藩 1968 「元代科举制度」『国立政治大学学报』17
- 姚 大力 1982 「元朝科举制度的行廢及其社会背景」『元史及北方民族史研究集刊』6 (姚大力2011に再録)
- 2011 『蒙元制度与政治文化』北京：北京大学出版社
- 姚 從吾 1970 「忽必烈平宋以後的南人問題」『国立政治大学辺政研究所年報』1 (姚從吾1982に再録)
- 1982 『姚從吾先生全集七：遼金元史論文 (下)』台北：正中書局
- 櫻井智美 2004b 「『礼部韻略』与元代科举」『元史論叢』9
- 2004c 「近年来日本の元史研究——以“文化政策”為中心——」『中国史研究動態』2004-3
- 于 磊 2008 「『癸辛雜識』之賀詩風波——論方回的人品及其他——」『元史及民族与边疆研究』20
- 查 洪德 1999 「虞集的學術淵源与學術主張」『殷都學刊』1999-4
- 展 龍 2008 「試論元末漢族士大夫的民族認同意識」『内蒙古社会科学』2008-6
- 2010a 「元末士大夫組織「義兵」問題探析」『河南大学学报 (社会科学版)』2010-3
- 2010b 「元明之際士大夫研究總述」『中国史研究動態』2010-4
- 張 沛之 2009 『元代色目人家族及其文化傾向研究』天津：天津古籍出版社
- 章 毅 2007 「元明之際徽州地方信仰的宗族轉向：以婺源大畈知本堂為例」『中国文化研究所學報』47
- 2008 「理学社会化与元代徽州宗族觀念的興起」常建華 (編) 『中国社会歷史評論 第9卷』天津：天津古籍出版社
- 趙 華富 1999a 「元代的新安理学家」『學術界』1999-3 (趙華富1999cに再録)
- 1999b 「宋元時期徽州族譜研究」『元史論叢』7 (趙華富1999c・2011に再録)
- 1999c 『兩駟集』合肥：黄山書社
- 2004 『徽州宗族研究』合肥：安徽大学出版社
- 2011 『徽州宗族論集』北京：人民出版社
- 鄭 忠 1994 「「決去豈我志、知止亦所諳」——略論元代虞集的政治生涯——」『徐州師範学院學報』1994-1
- 周 祖謨 1946 「宋亡後仕元之儒学教授」『輔仁雜誌』14-12
- 朱 開宇 2004 『科举社会・地域秩序与宗族發展』台北：国立台湾大学

文史叢刊

【英文】

- Dardess, John W. 1974. "The Cheng Communal Family: Social Organization and Neo-Confucianism in Yuan and Early Ming China." *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 34.
- Langlois, John D. 1978. "Yu Chi and His Mongol Sovereign." *Journal of Asian Studies* 38-1.
- Hymes, Robert P. 1986. *Statesmen and Gentlemen: the Elite of Fu-Chou, Chiang-His, in Northern and Southern Sung*. London: Cambridge University Press.
- Smith, Paul J. and von Glahn, Richard (eds.). 2003. *The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History*. Cambridge: Harvard University Asia Center.